

ヴァナキュラー文化としてのポッドキャスト ——スコットランド独立運動における「新しい聴く文化」——

加藤 昌弘

はじめに

クリスマスが近づく2004年末の喧騒の中だったか、当時とにかくアップル社の携帯音楽プレイヤーである iPod は売れに売れていて、どこも品薄だった記憶がある。というのも、価格もだいぶ落ち着いてきた20GBのハードディスクを内蔵した第4世代モデル。その在庫を大阪駅のJR高架下に店舗を構えていたパソコン量販店で偶然見つけて買い求めたときの興奮を、私はいまだに鮮明に思い出すことができるからである。当時の私にとって、そして世界中のおおかたの iPod ユーザーにとっても、その最新ガジェットの魅力はおよそ5,000曲をポケットに収めて持ち運び、場所に縛られず好きなタイミングでお気に入りの音楽を聴くことができることだった。

ところが、この iPod に代表されるデジタルオーディオプレイヤーは、音楽を楽しむという本来の機能とはやや異なる副産物的な文化、しかし今となっては極めて重要なポッドキャストと呼ばれる新しい文化の象徴となった。iPod でポッドキャストを聴く環境が整ったのは2005年だった。時代はまだスマートフォンが本格的に普及する前夜で、日本や英米など情報通信環境がいち早く普及した地域では、各家庭にインターネット回線とパーソナルコンピュータが行き渡りつつあった頃である（総務省, 2005）。

本稿はこの2000年代半ばに生じたポッドキャストを、マイノリティが自らの声を再発見し、人と人がつながる共同体の感覚を醸成する役割を果たす現代のヴァナキュラー文化として位置づけ、考えていく。これまでヴァナキュラーは、特定の地域や土地といったローカルに根差した言語や建築など、どこかでそれらが非標準的であることを含意しつつ、ときに世界的な均質化を迫るグローバル化と対比する限定された文脈で用いられてきた。しかし現在のヴァナキュラーへの注目は、より広がりを見せている。文化人類学者の今福龍太が論じたように、特定の土地に根ざしながらもこれまで無視されてきた「普通の人々」や「日常の場所」が隠し持っている文化的な力をあぶり出す戦略的な概念としてもヴァナキュラーは用いられる（今福, 2003）。近年ではフォークロアと対照されてきた民俗学を「ヴァナキュラー・スタディーズ」として再定義しようとする島村恭則による試みのように、ますますヴァナキュラーという概念を通じた非エリートの日常性へのまなざしは重きを置かれつつある（島村, 2020）。

ヴァナキュラー文化は、こうした背景を踏まえながらウェルズ恵子が「ある集団の人々の生活に深く関連した文化と、特定の時期や時代や状況や土地で発生した文化、および、そうした文化の底流となっている伝統」と定義したように（ウェルズ, 2018）、政府や文化エリートのような権威にとられない通俗的な文化や、時代を問わず大衆の日常生活に根ざしている大衆文化への関心に根ざしている。これは社会史や文化史が光を当てようとする私たちが見過ごしてきた過去への視点と共鳴するし、スチュアート・ホールら英国流のカルチュラル・スタディーズによる労働者階級や移民

文化社会に対するまなざしとも多分に重なり合う。ウェルズが強調するように、ヴァナキュラー文化研究とは、決して民俗学に限定されるものではなく、もっと学際的な広がりの可能性を秘めた領域だと言えるだろう。

そのような近年のヴァナキュラー文化研究の一端を担うことを念頭に置きつつ、まずは近年「新しい聴く文化」として注目されるポッドキャストを、「参加型文化」と「親密性の架け橋」という点で、社会の中のマイノリティにとっての重要なメディア文化として先行研究を整理する。そしてマイノリティに関わるケーススタディとして、スコットランドにおける自治あるいは独立を求める運動を取り上げ、2014年9月に実施された連合王国からのスコットランド独立の是非を問う住民投票に先立って配信を開始した二つのポッドキャスト番組の試みを紹介する。最終的にはスコットランドの独立運動においてさまざまな参加型文化が果たしてきた役割に鑑みながら、新たにポッドキャストに期待される役割について批判的に考察してみたい。

1. ポッドキャストとは何か

(1) ポッドキャストの定義と仕組み

ポッドキャスト（ポッドキャストイング）とは、アップル社の iPod と、放送を意味するブロードキャストイングをかけた造語である。この新語の出自を特定することは困難だが、一般的には2004年の英紙『ガーディアン』のベン・ハマーズリーの記事がポッドキャストの初出として広く認識されている（Cridland, 2022）。当時、RSS と呼ばれるインターネット上の効率的な情報配信の仕組みが、文字情報だけでなく圧縮された音声ファイルの配信にも利用され始めた状況を踏まえて、ジャーナリストのハマーズリーは「革命が聞こえる（Audible Revolution）」と題して、インターネットを通じた新しい音声配信の仕組みの登場を広く読者に紹介した。

「今になってみて考えれば、全ては当たり前のように思える。アップル社の iPod のような MP3 プレイヤーを私たちはポケットに入れて持ち運び、安価あるいは無料のオーディオ編集ソフトウェアが登場し、そしてブログがインターネットの一角を占めるようになった。これら全てがアマチュアによるラジオという新しいブームの礎となっている。しかしそれをなんと呼べばいいだろう？ オーディオブロギング？ ポッドキャストイング？ それとも、ゲリラメディアとでも？」（Hammersley, 2004）

ここでハマーズリーは、iPod というデジタルオーディオプレイヤー、各家庭に普及したパーソナルコンピュータ、そして情報通信回線としてのインターネットという三つの要素が組み合わさったことで、新しい音声配信のブームが生じていると分析している。ここで興味深いのは、彼は新しいブームを説明する際に「アマチュアによるラジオ」という読者にとって馴染みの深い比喩を用いながらも、提案する新興メディアの三つの名前候補のどれにも「ラジオ」を用いなかったことだろう。「オーディオブロギング」とは文字通り、テキスト（文字）の代わりにオーディオ（音声）を用いたブログ（日記やエッセイをインターネット上に掲載する仕組み）を意味する。「ゲリラメディア」とは、エリートによって管理される中央集権的なマスメディアに対して戦いを挑む無数の不正規兵たちに

よるインディペンデントなメディアを思わせる。この中から「ポッドキャストリング (ポッドキャスト)」という名前が定着したのは歴史上の偶然かもしれないが、その他の忘れ去れていった二つの候補も、ポッドキャストがいかにラジオとは異なるメディアとしてイメージされていたのかを色濃く伝えている。

こうして2000年代半ばに生じたポッドキャストは、決して主流文化とは言えないインターネット文化のひとつでありながら、iPodのようなデジタルオーディオプレイヤーの普及に後押しされ、徐々に大衆的な日常生活に定着していった。このブームは英語圏で始まり、各地域の情報通信環境などの要因によって疎密はあるが、世界各地のヴァナキュラーな言語によって配信されるようになった (Royston, 2021)。日本でも2005年から2007年にかけて多くのポッドキャストの解説書が出版されるなど日本語ポッドキャストが最初のブームを迎えたのち、幾度かの注目と忘却の過程を経験しながらも着実にメディアとしての規模を拡大している過程にある。

ポッドキャストとラジオは何が違うのだろうか。気軽なおしゃべりから骨太なドキュメンタリや最新のニュース番組まで、音声を中心としたオーディオ・コンテンツであるポッドキャストは、表面的にはラジオにとってもよく似ている。ポッドキャストはこれまでラジオが聞かれていたようなタイミング、例えば移動中や家事の最中などに聴取されることが多い (オトナル・朝日新聞, 2022)。こうした極めてラジオ的な特徴から、ポッドキャストはしばしばインターネットを通じたラジオとして説明されてきた。近年は聴取者の減少に苦慮する既存のラジオ局が、インターネットを利用するポッドキャスト配信に積極的に参入したことによって、ラジオとポッドキャストの境界線はますます曖昧になりつつある。

ラジオとポッドキャストを区別する先駆的な研究としてみなされるのは、英サンダーランド大学で音声メディアを研究し、自身もコミュニティラジオ局「スパーク」の運営に関わるリチャード・ベリーによる2006年の論文である。彼の「iPodはラジオ・スターを殺すのか」と表題がつけられた論文は——これは時代から去りゆくメディアとしてのラジオをノスタルジックに歌ったバグルスの1979年のヒット曲「ビデオがラジオ・スターを殺した (邦題「ラジオ・スターの悲劇)」」にひっかけたものだが——私たちがポッドキャストを「ラジオ」と表現してしまうことで失われてしまう多くのあたらしい性質への注目を促している (Berry, 2006: 155)。

ベリーによれば、多くのポッドキャストがパーソナリティによるトークを中心に置き、会話の合間にジングルや音楽を挟みこむラジオ的な構成をとっているが、同じ番組であっても各回の長さは常に一定ではないこと、そしてラジオのように特定の日時に配信されず、ほとんどが不規則な配信であることを指摘している (ibid.: 155-6)。ポッドキャストの制作者がそのような不規則なスタイルで配信しうるのは、そのオーディエンスであるリスナーたちもまた、番組を聴取する時間帯や場所において自由だからである。この自由を提供したのが、インターネットによって番組コンテンツを音声ファイルとしてリスナーがダウンロードできる環境、そしてその音楽ファイルを持ち運ぶためのiPodのような携帯デジタルオーディオプレイヤーだった。これらの機器は、やがてスマートフォンによって置き換えられていくことになる。

また、論文集『ポッドキャストリング』(2018年)を出版し、近年のポッドキャスト研究を牽引する英ブライトン大学のダリオ・リナレスらは、ポッドキャストがインターネットを利用することによってラジオ局のネットワークを迂回し、独自のコンテンツを直接リスナーに届けたいという欲

望に根差したメディアである点を強調する (Linares, Neil and Berry, 2018)。メンフィス大学のクリス・マークマンの研究が示すように、アマチュアのポッドキャスターの多くが、自分たちでもラジオをやってみたいという動機によってポッドキャストを始めている (Markman, 2012)。ベリーは、2016年の論文であらためてラジオとポッドキャストの違いについて検討した際に、マークマンの議論を引き継ぎながら、ポッドキャスターたちは商業ラジオを代替しようとしているのではなく、商業的なマスメディアではカバーできないニッチな趣味や関心を拾いあげ、隙間を埋めるような役割を果たしている点を強調している (Berry, 2016)。まさにポッドキャストは、私たちの日常性を広く発信し共有することができるような、現代のヴァナキュラー文化のプラットフォームになっているのである。

(2) マイノリティにとっての「新しい聴く文化」の意義

ポッドキャストを声の文化というよりは「聴く文化」としての側面を強調する英ブライトン大学のダリオ・リナレスらは、カルチュラル・スタディーズの諸成果、例えばマイケル・ブルとレス・バックが社会における視覚文化の優越に対するカウンターとして企図した「聴く文化」の議論の先に、ポッドキャスト研究を位置づける (Linares, Neil and Berry, 2018)。マイケル・ブルは、まさにポッドキャストが iPod という携帯型オーディオプレイヤーと不可分であったように、かつてソニーのウォークマンがもたらした「街を歩きながら音楽を聴く」という新たな日常的体験に注目した研究でも知られている (Bull, 2000)。ブルをウォークマン研究に駆り立てたのは、現代の都市研究あるいは文化研究における「聴くこと」への関心の欠如だった (Ibid.: 2)。ブルが強調したのは、街で流れる音楽と言っても、それが街頭のスピーカーや店内放送から不特定多数に向けて流される音楽ではなく、それぞれの個人が耳に装着したイヤフォンを通じて、別々の音楽を聴きながら街を歩く状況の新しさだった。

もちろんメディア研究も同様に「聴くこと」に関心を払ってきた。そこで指摘されてきたのが、ラジオという近代的なメディアがもたらす親密性の問題である。社会学者の福永健一が整理したように、ラジオを通じて聞こえてくる電氣的に増幅された「声」に惹きつけられてしまうことは、ラジオ研究の初期からの疑問のひとつだった (福永, 2015)。リスナーはその声を発する人間に対する個性や人格を声から理解し、まさにその「パーソナリティ」との間に親密な関係性を想像する。もちろんラジオ側もそのような特徴を知悉し、話す速度や音程、雰囲気などを洗練させることによって「ラジオというメディアに適した声」を創り出してきさえたのである (同上: 126-7)。

こうした議論を踏まえて、ポッドキャストはラジオとは異なる「親密性の架け橋」になることができると思うのが、ニューサウスウェールズ大学のウカシュ・シュアンテクである (Swiatek, 2018)。ポッドキャストはラジオと同じような親密なメディアという特徴を持ちながら、彼によれば、ポッドキャストは参加型メディアである特徴を生かして、これまでは分断されていた人びとを繋ぐ役割を果たしている。ここで興味深いのは、ポッドキャストがポッドキャスターとリスナーのあいだの感情的なつながりを作り上げていくことは、社会的にせよ政治的にせよ、何らかのゴールを目指して団結するコミュニティの形成を促すという点である。ここでシュアンテクは性的マイノリティを支援する団体によるポッドキャストの例を出しながら、個人と個人をつなぐメディアであるポッドキャストが、社会・文化的な境界線や、時間や距離の隔たりを克服し、本来は出会わない

はずの集団を結びつける力について論じている。聴くことは、パワーをもたらさうなのだ。

このような「新しい聴く文化」としてのポッドキャストは、これまでの社会においてマイノリティに属してきたような集団にとっては、自分たちの声を発信するだけでなく、その声を共有する親密性のコミュニティを形成できる可能性を持っている。ベリーが、ポッドキャストを「オーディエンスたちの声の再発見」として高く評価したように (Berry, 2006)、誰にでも発信側としての参入の機会を与えているポッドキャストは、参加型文化を担うメディアとなっている。メディア・コンヴァージエンスの論者としてよく知られるヘンリー・ジェンキンスは、米国の現代文化を概観しながら、アマチュアによる歌唱やダンスなど、マスカルチャーの台頭によって社会の周縁に追いやられた民俗文化と呼びうるような「草の根の創造性の再登場」が、ウェブによって頂点に達したと整理している (ジェンキンス, 2021: 250-2)。ジェンキンスは、大衆による創作が商業文化との対話の中で形成され、しばしば商業文化のスタイルを模倣し、材料を転用していることは当然であるとする (同上: 252-4)。そのような借用の数々によって、大衆はかつて商業文化に奪われたヴァナキュラーな文化を、自分たちの手に「引き戻す」のである (同上: 251)。

その一方でスペインのメディア社会学者であるガルシア＝マリンは、確かに新時代のウェブを基盤とするポッドキャストが「声なき者」が自らの声を発することができる参加型文化のメディアになっていることを認めながらも、その半世紀ほど前から存在するジンの文化からの延長線上にポッドキャストを位置づけ、批判的に考察している (García-Marín, 2020: 120)。発信者とオーディエンスの間の垣根が極めて低いメディアを媒介に形成される参加型文化は、決してウェブ上だけに限られるわけではない。歴史的にはジンやファンジンと呼ばれる出版社や大手流通を通さない小規模な出版メディアも重要な参加型メディアとして数えられてきたし、そこには日本におけるオーディエンスによるテキストの能動的な読みに基づく二次創作を含めた同人誌文化を連ねることもできる。だからこそガルシア＝マリンは、ジンの時代からポッドキャストに至るまで歴史的に変わらぬ参加型文化の問題点として、その小さなメディアで発せられる小さな声が誰かに「聴かれること」の困難さを指摘している (ibid.: 121)。例えば大量の情報が行き交うウェブの中から、誰かに自分の「声」を拾いあげてもらうためには、Googleのような検索エンジンにせよ、AppleやSpotifyのようなポッドキャストのプラットフォームにせよ、検索結果の順位が大きな意味を持ち、ほとんどの場合、検索結果の順位は大規模な企業や組織にとって有利に働いている。彼はこの構造からポッドキャストも自由ではなく、名もなき市民の声よりも実社会で大きな影響力を持っているエリートの声を目立たせる結果になっている点を批判している (ibid.)。

2. 事例研究：スコットランド独立運動とポッドキャスト

(1) 海賊ラジオからポッドキャストへ

イギリスという連合王国の中に属するスコットランドにとってポッドキャストのようなメディアが重要なのは、イギリスからの自治や独立をめざす運動がこれまでずっとマイノリティの声として位置づけられてきたからである。現在のスコットランドは地域としても国としても想像されるが、少なくとも中世にはスコットランド王国として独自の王権と国家を形成していたと考えられている。しかしながら 1707 年にイングランドとスコットランドが連合王国を形成したことで、スコッ

トランドは政治制度の上では近代的な主権国家としてではなく、連合王国であるイギリスの中の一地域として位置づけられた。その結果、スコットランドの研究者たちが指摘してきたように、スコットランドは近代的な国民意識を形成するための鍵となるナショナル・メディアを有することなく、制度的にもアイデンティティの上でも、英国に従属するローカルな位置にとどまってきたのである（加藤，2008）。

そのような歴史を反映する事例としては、1950年代のスコットランドにおいてイギリスの公営放送である英国放送協会（BBC）の深夜帯のテレビ電波を違法に乗っ取り、自治・独立の主張を繰り広げた海賊ラジオ「ラジオ・フリー・スコットランド」がある（加藤，2016）。当時BBCの全国放送においては、スコットランドの地域政党であるスコットランド国民党に対する割り当て時間が無く、スコットランドにとっては公平とは言い難かった。そのような状況下で、一般人たちが警察の目を逃れて都市内で毎晩のように小型の電波送信機を移動させながら、市民による「参加型文化」としての海賊ラジオが、イギリスという巨大な敵に対するゲリラ戦を挑んでいたのである（同上：340）。これはポッドキャスト以前、マスメディアのネットワークを迂回するインターネットのような手段が手元になかった時代に、マイノリティが声を発し、親密なコミュニティを形成するために戦った一例として位置づけることができる。その後もスコットランド独立運動は、チラシやミニコミ誌などの小さなメディアを駆使し、新聞やテレビ・ラジオといったマスメディアを迂回しながらも、現在までマイノリティによる社会運動として存続してきた（加藤，2018）。

2014年9月18日にスコットランドでは、イギリス政府との合意にもとづいて、連合王国からのスコットランド独立の是非を問う住民投票が実施され、結果は賛成が44.7%、反対が55.3%とほぼ半々に拮抗しながら独立は否決された。住民投票の結果はともかく、約84.6%という極めて高い投票率まで達した住民投票前の盛り上がりを支えたキャンペーンでは、独立賛成派の象徴となった「YES キャンペーン」を率いたスティーヴン・ヌーンがブログを通じて、マスメディアを迂回しながら自身の声を直接語りかけようとしていた（Torrance, 2012；2014；Noon, 2014）。賛成派・反対派のどちらも街頭での活動はもちろん、オンライン上のウェブやソーシャルメディアにおける活動が大きな役割を果たした（浦口，2017）。

(2) 二つのポッドキャスト番組

そのようにしてマスメディアでの報道に対して批判を加えつつ距離をとり、あくまでも草の根で「YES キャンペーン」を展開していった独立賛成派にとっては、ブログやソーシャルメディアに加えて、ポッドキャストも重要なメディアだった。ほぼ半々と拮抗した結果からもわかるように、独立の是非をめぐる議論は僅差のまませめぎ合っていた。独立賛成派は、独立反対派のキャンペーンである「Better Together」に対してだけでなく、イギリス寄りの立場を取ってニュース報道するマスメディアによって醸成される反独立の雰囲気（Greig, 2016）にも敏感に反応し、声を発し続ける必要があった。

ここで2014年当時も配信されていた二つのポッドキャスト『The Scottish Independence Podcast』（図1）と『Scottish Independence Podcast - IndyLive Podcast（以下、IndyLive Podcastと表記）』（図2）に注目したい。両者共に青地に白い斜め十字が印象的なスコットランドの国旗をモチーフにしたシンボル画像を用いている上に、似通った番組名で判別が難しいが、どちらも2014



図 1

『The Scottish Independence Podcast』



図 2

『Scottish Independence Podcast - IndyLive Podcast』

年9月のスコットランド独立の是非を問う住民投票に先駆けて、スコットランド独立運動に賛成する立場からポッドキャストの配信を開始した点で共通している。

一つめの『The Scottish Independence Podcast』は、特定の政党や企業とは繋がりのないインディペンデントなポッドキャストである。2012年9月に配信を開始して、「スコットランド独立運動を特集する最初かつ最古のポッドキャスト」を自称する。マイケル・グリーンウェルと名乗る個人が番組を制作・配信している。彼は「インディペンデントなスコットランド独立主義者で、特定の団体のメンバーではない」ことを番組のブログでも強調し、数多くの職業を転々としてきたことを綴ることも放送や番組制作のプロフェッショナルではないアマチュアのポッドキャスターであることを印象づけている。

このグリーンウェル個人の熱意と努力によって続けられてきたポッドキャストは、本稿執筆時の2022年11月の時点では、2020年6月の187回目が最新のエピソードとして配信されている（ただし番組内のサブ番組まで含めると300回弱となる）。ここ2年ほどは配信が途絶えていることからわかるように、あくまでも個人の熱意によって、かつ生業としてではなく副業や趣味として配信される多くのインディペンデントなポッドキャストには配信間隔の不安定さがつきものである。しかし番組ブログでは、2022年6月に仕事や育児といった個人的な事情で配信が滞っていることを綴り、新たなプロジェクトを立ち上げたいという意志をグリーンウェルは示している（Greenwell, 2022）。

配信間隔同様、各番組の長さや内容も大きくばらつきがあるが、その中でポッドキャスターとリスナーの間の親密な関係を想起させるエピソードがある。住民投票が実施された2014年9月18日が明けて、19日の未明までに住民投票の結果が明らかになった直後、スコットランド独立が否決された結果に対して、詳細欄に「我々はもう一度やれる（We'll do again）」とだけ記された4分間のエピソードが配信された。

「どうも、スコッティッシュ・インディペンデンス・ポッドキャストです。グラスゴーにあるパブのトイレの近くで現地収録しています。今日はもうどこかに出かけてみた？ 私たちはよくやったし、私たち自身のことを誇らしく思っているという物語は目にするけど、お祝いの様

子はまったく見かけないね。今はそこまで私はいけなかった。でもまだこれは第一ラウンドです。最終的には私たちはそこにたどり着けるはずですよ。……（中略）……不可能はない。今はただ涙を地面に落とすことを許してほしい。自信を失わないで。」（Greenwell, 2014）

上記引用は、番組エピソード冒頭の、かなり雑音混じりの環境で収録したと思われる1分ほどのトークから筆者が書き起こして訳出したものである。ここでは独立反対がわずかに上回った住民投票の結果に打ちのめされながらも、飾らず、率直にリスナーに対して語りかけるポッドキャスターの姿をみてとれる。ここではおそらく意図せず「私」と「私たち」が混在しており、独立まで到達できなかったことが個人的な物語としても、最後には独立まで到達できるはずだというメッセージはリスナー全員に対する呼びかけとしても響いている。このポッドキャスター自身の声に耳を傾ける無数のリスナーたちが感情的なつながりを感じるような、スコットランド独立という目的のために形成したコミュニティがこのポッドキャストには確かに存在したのである。

この『The Scottish Independence Podcast』は、2014年9月18日の住民投票の前後の配信は、6月に7つ、7月に7つ、8月に8つ、9月に9つと投票日に向けてハイペースに番組を配信した。それぞれのエピソードは30分前後を標準としながら一定ではなく、長いと60分を超えることもあった。しかし住民投票の否決後、この2014年9月20日の配信の後には、10月には2つ、11月には2つ、そしてその後は翌年2015年の2月まで番組の配信がなかった。このポッドキャストの沈黙すら感情的であり、コミュニティ全体に対するメッセージ性をはらんでいると言えるのではないだろうか。

二つめのポッドキャストである『IndyLive Podcast』は2013年から番組を開始していて、現時点まで精力的に新しいエピソードを配信し続けている。先述の『The Scottish Independence Podcast』とは大きく異なるこの番組の特徴は、個人ではなく組織によって制作・配信されていることである。番組ページでは「普通のスコットランド人たち」が集まったチームで制作されていることが明記されているし、スコットランドに拠点をおいて活動する「インディペンデンスライブ・メディア」の一部門であることを謳っている。したがって配信するコンテンツはポッドキャストだけでなく、動画共有サイトYouTubeを用いた生中継とアーカイブ映像にも大きな比重を置いている。テロップなどオーバーレイさせる映像の仕上がりは、テレビのニュース番組的であり、アマチュア的ではあるが同時にプロフェッショナルを意識している。かつてスコットランド自治議会の主席大臣を務めたアレックス・サモンド——しかしその後2018年に性的スキャンダルでスコットランド国民党を追われ、自らの政党であるアルバ党を立ち上げて活動をしている——の講演会の様子など、衆目を集める企画を多数配信している。

この「インディペンデンスライブ・メディア」は、2013年11月以降、1,000を超える独立関連イベントを全て無料で中継してきたと記してある通り、ポッドキャストは活動全体のなかの一部分に過ぎない。独自のYouTubeチャンネルにも2013年12月公開の動画を最古として、現時点までに多くの動画が公開されている。チャンネル登録者数は8,000人程度と必ずしも際立って多いわけではないが、独立運動関連イベントや講演会の様子、識者を招いてのニュース番組風の動画を豊富に制作・配信している。このように活動の規模が大きいだけに必要となる運営資金は、独立運動の支持者たちとクラウドファンディングによって賄われている。ニュースや時局の解説についても専

門家を複数招いての対談形式での番組を制作するなど、『The Scottish Independence Podcast』がしばしば示す個人的な感覚とは大きく異なる。『IndyLive Podcast』は組織的に、かつ従来のマスメディアを補完、あるいは代替するオルタナティブ・メディアのひとつとして、戦略的にポッドキャストを機能させようとしていると言えるだろう。

おわりに

本稿では、マイノリティによる参加型文化としてポッドキャストを捉えて論点を整理した上で、2014年に実施されたスコットランドにおける住民投票に際して配信された二つのポッドキャスト番組を事例として取り上げた。二つのポッドキャストは、どちらもマイノリティが自らの声を再発見し、親密なコミュニティの感覚を醸成するメディアとして機能してきたと評価できるし、どちらもスコットランド独立賛成派を後押しする点では一致していた。組織によって運営される『IndyLive Podcast』は、「普通のスコットランド人」の視点を強調しつつも多彩かつ完成度の高いコンテンツを定期的に提供しており、インディペンデントなメディアではあるが、マスメディアの代替ともなりうるオルタナティブ・メディアとしての側面が強かった。その一方で一個人によって運営される『The Scottish Independence Podcast』の規模は『IndyLive Podcast』に比べて小さいが、1950年代の海賊ラジオ「ラジオ・フリー・スコットランド」のような市民的な抵抗や、ジンやミニコミ誌のような個人的規模の参加型メディアを用いた社会運動の系譜として位置づけられると考えられる。いずれにせよ番組内容の詳細な内容分析や、リスナーとの双方向的なコミュニケーションのありかたといった実証的な研究を今後の課題とし、マイノリティ集団にとってのポッドキャストの可能性を引き続き検討していきたい。

本稿で言及したリチャード・ベリーやダリオ・リナレスら、多くのポッドキャスト研究者と同じく、私自身も2008年からポッドキャスターとして独自の番組を制作し、リスナーとのやりとりを積み重ねる当事者のひとりとして、「親密性の架け橋」と呼びうるようなポッドキャストの役割を実感してきた。ジェンキンは「アマチュアが創るものはほとんどがとんでもなくひどいが、文化が栄えるにはひどい作品を作り、フィードバックをもらい、改良できるような場所が必要だ」として、ウェブを介して広がる草の根に民俗文化の可能性を見出した（ジェンキンズ, 2021: 252-3）。大衆の日常性のなかにあるヴァナキュラー文化にとっても、多くの参加者を生み出すウェブやポッドキャストは21世紀における重要な場になっている。スコットランド独立運動も、2014年前後のように政治の表舞台に登場することはあるが、歴史的にはマイノリティによる草の根のなかに根ざしてきた運動である。もしスコットランド独立が実現するとすれば、政治家の気まぐれやマスメディアのヘッドラインが結果を決するのではなく、ポッドキャストのような無数のアマチュアたちによるヴァナキュラー文化による「草の根の創造性」が決すると信じたい。

参考文献

- Berry, Richard. "Will the iPod Kill the Radio Star?: Profiling Podcasting as Radio." *Convergence* 12, no. 2 (2006): 143-62.
- . "Podcasting: Considering the Evolution of the Medium and Its Association with the Word 'Radio.'" *The Radio Journal International Studies in Broadcast and Audio Media* 14, no. 1 (2016): 7-22.

- Bull, Michael. *Sounding Out the City: Personal Stereos and the Management of Everyday Life*. Berg, 2000.
- Cridland, James. "The History of the Word 'Podcast.'" *Podnews* (26 July 2022). <<https://podnews.net/article/history-of-word-podcast>> (2022年11月28日最終確認)
- 福永健一「「ラジオの声」の生成史：1920年代米国のラジオにおける声の経験についての考察」『マス・コミュニケーション研究』87（2015年）：119～136頁。
- Hammersley, Ben. "Audible Revolution." *Guardian* (12 Feb 2004). <<https://www.theguardian.com/media/2004/feb/12/broadcasting.digitalmedia>> (2022年11月28日最終確認)
- 今福龍太「旅する理論：ヴァナキュラー論」『増補版 クレオール主義』筑摩書房、2003年、166～85頁。
- García-Marin, David. "From Zine to Podcast: Rethinking Participatory Culture from a Comparative Analysis of Alternative Media." *Doxa Comunicación* 30 (2020): 107-125.
- Greenwell, Michael. "The Scottish Independence Podcast - No Platitudes." (20 September 2014). <<https://michaelgreenwell.wordpress.com/2014/09/20/the-scottish-independence-podcast-no-platitudes/>> (2022年11月29日最終確認)
- . "I Think I May Have It! - Teaser." (15 June 2022). <<https://michaelgreenwell.wordpress.com/2022/06/15/i-think-i-may-have-it-teaser-trailer/>> (2022年11月28日最終確認)
- Greig, Alastair. "Sentiment Analysis of the BBC's Digital Content During the 2014 Scottish Independence Referendum Campaign." *Scottish Affairs* 25, no. 4 (2016): 419-35.
- ジェンキンス、ヘンリー『コンヴァージェンス・カルチャー：ファンとメディアがつくる参加型文化』渡部宏樹・北村紗衣・阿部康人共訳、晶文社、2021年。（原書：Henry Jenkins. *Convergence Culture: When Old and New Media Collide*. New York University Press, 2006.）
- 加藤昌弘「イギリス・スコットランドのメディア研究における「脱ナショナリズム」：メディア・グローバル化の時代のナショナルな想像力の再検討」『立命館文学』604（2008年）：203～15頁。
- .「オルタナティブ・メディアとしての「海賊ラジオ」：現代の地域主義とラジオ・フリー・スコットランド」、志村真幸編『異端者たちのイギリス』（共和国、2016年）、323～47頁。
- .「1979年のスコットランド住民投票前後におけるオルタナティブ・メディアと社会運動——1980年代における地域主義の変化に関する歴史研究に向けて」『総合学術研究論文集（名城大学総合研究所）』17（2018年）：1～10頁。
- Llinares, Dario, Neil Fox, and Richard Berry. *Podcasting: New Aural Cultures and Digital Media*. Cham: Palgrave Macmillan, 2018.
- Markman, Kris M. "Doing Radio, Making Friends, and Having Fun: Exploring the Motivations of Independent Audio Podcasters." *New Media and Society* 14 no.4 (2012): 547-565.
- Markman, Kris M., and Caroline E. Sawyer. "Why Pod? Further Explorations of the Motivations for Independent Podcasting." *Journal of Radio & Audio Media* 21 no.1 (2014): 20-35.
- Noon, Stephen "Federal Flirtations." (26 June 2014). <<https://web.archive.org/web/20140925073454/http://stephennoon.blogspot.com/>> (2022年11月28日最終確認)
- オトナル・朝日新聞『ポッドキャスト国内利用実態調査2021』（2022年2月）。<<https://otonal.co.jp/podcast-report-in-japan2021>> (2022年11月28日最終確認)
- Royston, Reginold A. "Podcasts and New Orality in the African Mediascape." *New Media and Society* (29 July 2021). <<https://doi.org/10.1177/14614448211021032>>
- 島村恭則『みんなの民俗学：ヴァナキュラーってなんだ？』平凡社新書、2020年。
- 総務省『通信利用動向調査』2005年。<<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05a.html>> (2022年11月28日最終確認)
- Swiatek, Lukasz. "The Podcast as an Intimate Bridging Medium." In *Podcasting: New Aural Cultures and Digital Media*, edited by Dario Llinares, Neil Fox and Richard Berry, 173-87: Palgrave Macmillan, 2018.
- Torrance, David. "Better Together or Yes Scotland? Year One in the Battle of Britain." *Scottish Affairs* 80, no. 1 (2012): 62-90.
- . "Referendum Debate: Year Two." *Scottish Affairs* 84, no. 1 (2013): 17-40.
- 浦口理麻「スコットランド独立住民投票における賛成派のポジティブ・キャンペーンと反対派のネガティブ・キャンペーン、および両派の感情への訴え方の分析」『カレドニア』45（2017年）：25～38頁。
- ウェルズ恵子「はじめに」ウェルズ恵子編『ヴァナキュラー文化と現代社会』同朋社、2018年、v～x頁。

(名城大学人間学部准教授)

Podcasting as Vernacular Culture:
New Aural Cultures in the Scottish Independence Movement

by

Masahiro Katoh

While podcasting as an amateur 'radio' production has globally achieved popularity in the twenty-first century, we have still not grasped the importance of this new participatory culture. Why should we distinguish podcasting from radio although the contents of most podcasts resemble radio programs? Why do we listen to amateur podcasts instead of commercial radio stations? This study aims to show that podcasting is a crucial media for minority groups to rediscover their vernacular voices and to develop a sense of community between podcasters and listeners. Firstly, this paper introduces critical arguments from recent podcast studies, focusing on the aural and intimacy of podcasting. Secondly, the analysis examines two podcasts in the 2014 Scottish independence referendum and portrays their distinguished nature as participatory media. *The Scottish Independence Podcast* (2012–) is independently published by an 'independent independista' and sometimes shares private emotions between listeners. And the *Scottish Independence Podcast – IndyLive Podcast* (2013–) as a team production of 'ordinary Scots' produces well-managed contents as an alternative media to oppose British and Scottish national media. The result suggests the feasibility of amateur podcasting to accelerate the Scottish independence movement at the grassroots level, and a further survey of amateur podcasting would be required to show how the programs work as participatory and vernacular culture.